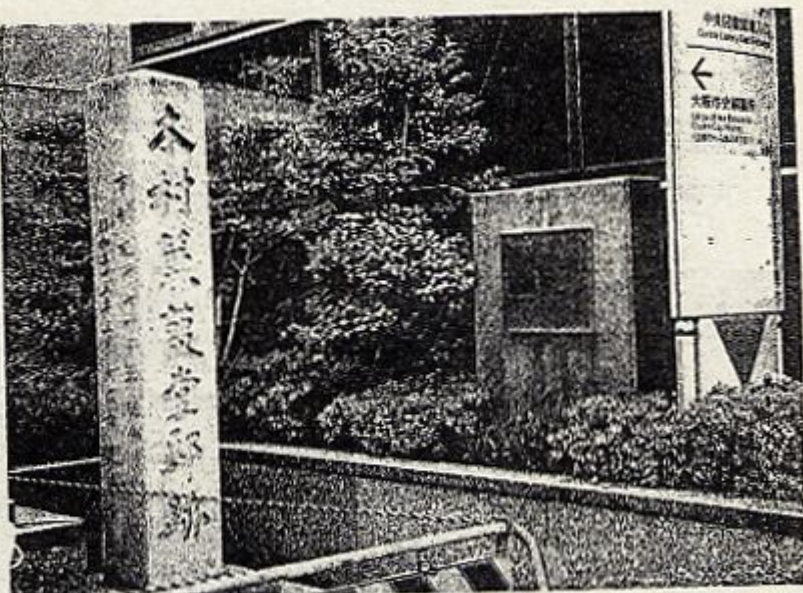


木村兼葭堂邸跡 (きむらけんかどうていあと)

大阪中央図書館の東南に碑がある。碑には、「兼葭堂は、元文元年(1736)、この近くの北堀江五丁目に生まれ、本草学を始め、博学多芸の町人学者であった。」と記されている。

木村兼葭堂(1736~1802)の生家は、裕福な酒造家で、幼名小太郎、通称坪井屋吉右衛門、号は異斎(そんさい)。



あるとき、井戸を掘っていたら、古い芦の根が出てきたので、これは、古歌に名高い堀江の芦であろうと大喜びし、それに因んで兼葭堂と私宅を名付け、号にも用いたと言われる。

11歳で片山北海に漢学を学び、成人するに及んで、博学多才、詩にすぐれ書に長じ、池大雅に画を習って大雅そっくりの絵を描き、物産本草学(今日の博物学)に精通、オランダ語やラテン語にも通じて、『蘭音類聚』という本まで書き、兼葭堂といえば、博識の代名詞になるほどの町人学者であった。また、この兼葭堂の邸宅には、多くの文人墨客から学者文化人、ついには諸外国人までが訪れ、数多くの収集した資料とともに、図書館であり、博物館であり、知識人の一大サロンであった。彼の墓碑は、天王寺区餌差町の大応寺(浄土宗)にある。

写真の右にある碑の中の肖像画は、谷文晁が、生前の彼を追慕して描いたもの。

本草学(ほんそうがく)…中国古来の植物を中心とする薬物学。日本には、平安時代に伝わり、江戸時代に全盛となり、中国の薬物を日本産のものに当てる研究から、博物学・物産学に発展した。

片山北海(かたやま へいかい 1723~没年不詳)…江戸中期の儒学者。越後の人。大坂で儒学を講じた。

池大雅(いけ たいが 1723~1776)…江戸中期の南画家。京都の人。日本南画の大成者と言われる。

南画…中国絵画の系統の一つで、水墨による柔らかな描線と自然な感興を特徴とする南宗画(なんしゅうが)の影響のもとに独自の様式を追求した画

谷文晁(たに ぶんしやう 1763~1840)…江戸後期の画家。江戸の人。広く和漢洋の画法を学び、独自の南画で一家をなした。